

「土佐日記」 「十六夜日記」 及

「奥の細道」にあらはれたる交通情況

長谷川久一

東武鐵道が延長せられた、め今日では、淺草驛で乗車すれば東部日光まで二時間半ばかりで行けるのである。沿線中の「北千住」や「草加」の諸驛などは實に一瞬時にして行けるといふてもよろしい位である。處が芭蕉翁北國旅行に出掛けた時分には其の名著「奥の細道」によるといふと、江戸出發、勿々道路よりも水上に道をと、千住迄は船に乗つて行つたものらしい。

「千住といふ所にて船をあがれば前途三千里の思ひ、胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそそぐ」

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の初として、行く道なほ進まず、人々は途中に立ち並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、たゞかりそめに、思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を

重ぬといへども 耳に觸れていまだ目に見ぬ境 若し生きて歸らばと 定めなき頼みの末を懸け 其の日やうやう 草加といふ宿にたどり着きにけり

これで見ると奥羽旅行は當時にあつては實際命懸けの仕事であつた様に書かれてある 翁は年齢時に四十六 まだ左程に老齡といふのでもないし又門人の會良をも連れて居るのに拘はらず其の出發(三月廿七日)の光景を叙するに

上野谷中の花の梢 またいつかはと心細し

と云ふて居るし 随分立ちぎわのつらかつたものと見える 其れ丈け其の時代には旅行といふものが 不自由且つ難澁であつたことが思ひ知られるのである

「奥の細道」は實に鱗形本五十三枝の一小冊子にすぎないが 北國行脚の記録として實に一幅絶妙な有聲の畫と謂つべしである

抑も斯の種類の旅記の先縦をなすものは何かといへば、いふまでもなく 紀貫之の「土佐日記」を推さなくてはならない 而して斯う云う紀行日記は 單に自分自身の備忘録たるに止まらず 大概の場合に於て 他人の披讀を豫想して居るのである、土佐日記も亦そうであるといふことは 其の最後の言葉に「忘れがたく くちをしき事多かれどえつくさず とまれかくまれ疾くやりてむ」と書いてあるのに依つて知ることが出来る

今でいふ縣廳所在地即ち當時の「國府」の所在地は現今の高知市の東方二里許りの所で長岡郡國府村其のものである 任滿ちて京へ上ほることゝなり官舎を立ち出でた時の情景かれこれ知る知ら

ぬおくりす」と書かれてある。縣官が解任になつていざ出發といふ時の有様を是れ以上直截簡明に書きあらはすことは恐らく何人の筆を以てしても爲し能はざる所である

高知からそう遠く離れては居ない役宅から出發したのであるからもう直きに船に乗つて居る。そうして風力や風向の關係から諸所で風待ちをしたものであるから三十七泊の後に漸く難波の河尻についた

六日 みをつくしのもとよりいで、難波につきて河尻に入る。みな人々おんなおきな額に手をあて、よるこぶことふたつなし。かの舟ゑひの淡路の島のおほい子。京近くなりぬといふをよろこびて。舟底よりかしらをもたけて。かくぞいへる。

いつしかといふせかりつる難波瀾

葦こけそけてみ舟來にけり

いと思ひの外なる人のいへれば。人々あやしがる。これがなかにこゝちなやむ舟君いたくめで、舟ゑひしたうべりしみ顔には似ずもあるかなといひける。

淡路島に住む老婦人といふ豫想外の人が番狂はせるうまい歌を詠じたので。同じく船暈に悩んで居た舟君もこれにつりこまれてやつて來て。舟酔ひした其のやつれ顔にも似ず大そう傑作が出來たといつてほめちぎつた其の光景は眼前に彷彿として見るが如くいかにも巧みに描き出されて居る。京阪間に完全な道路があれば車が迎に來て居る譯であるがさういふ交通がなかつたゝめに今度は淀の川船に乗つた。船暈は感じないが偕て上流へ瀾るのであるから行程が容易に抄取らな

八日 なほ河のほりになづみて鳥飼のみ牧といふほとりにとまる 今宵舟君れの病おこり
ていたくなやむ

或る人あざらかなるものもて來たり 米してかへりごとす をとこどもひそかにいふなり
「いひほしてもつ釣るとや かうやうのこと所々にあり 今日せちみすればいを用ゐず

大阪府三島郡鳥養に泊つたことが分る 生憎同行の先生が持病を起して難儀をする 鮮魚を持
つて來てくれた人があつたから 代價として米を遣はす 其の日は又意地悪く六齊日に相當して
居たから折角買ひ取つた魚も食へない等と苦悶憂思具さに肝を刺す有様文氣實に口を衝いて出て
來るのである

土佐日記は紀貫之が土佐在任五箇年で職を解かれ京都へ戻る紀行で諸大家の說に依ると彼れの
六十四五歳の頃に執筆されたものといはれて居る 已に三十歳頃から一流の大家であつた彼れと
しては此の紀行を書く頃には思想も圓熟して居るし 且つは諧謔縱横で斯る傑作が出来上つたの
も決して無理のない所である 大阪上陸のあたりが芭蕉の千住上陸と對照して見ると頗る面白い
感じがする 芭蕉の北國旅行は元祿年間であるがそれでも尙ほ且つ交通不便で旅のやどりの物憂
きことを高調して居る

其の夜飯塚にとまる 温泉あれば 湯に入りて宿をかるに土座に筵をしきて あやしき貧家
なり 燈もなければ 圍爐裏の火かけに 寢所を設けて臥す 夜に入りて雷鳴り 雨頻に降

りて臥せる上より漏り 蛋蚊にせゝられて眠らず 持病さへ起りて 消え入るばかりになん
雨漏り式のバラック宿に泊まつた其のつらさ、せつなさ、遺憾なく云ひあらはして居る 今日
飯坂のことを飯塚と翁が書き違へたのに相違はない 現在の盛況と對比して見れば實に今昔其の
相違の著しきに驚かざるを得ないのである

「土佐日記は其の冒頭に「男もずといふ日記といふものを女もして試みんとてするなり」と筆者を無
名の一婦人に託してある 唯是れは自分直接の告白と云ふ態度でなく 容觀的觀照的の餘裕を生
ぜしめ此の日記をして一つの文藝作品として世に問はんとしたのが爲めである 之れに反して十六
夜日記は正直正銘の阿佛尼の作で間違ひなく婦人の手になつたもの而かも同人の二度目の作であ
る 阿佛尼の若年の頃の作品たる「轉寢記」と比較して見ると嘗つては遠江國迄は旅行したことのある
人である 即ち「十六夜日記」に「むかし父の朝臣にさそはれて『いかになるみの浦なれば』」などよ
みしころ とほつあふみの國まではみしかば」と書いてあるから 旅行といふことには夙に經驗の
あつた婦人である 吾が子爲相の所領に關する訴訟の爲め鎌倉迄下ると云ふのであるから 中々
隅には置けない權利思想の旺盛な當時に在つての新らしき婦人であつたと見える

惜しからぬ身一つは やすくおもひつれども 子を思ふ心の闇は猶しのびがたく 道をかへ
り見る恨はやらんかたなく さても なほ あづまの龜の鑑にうつさば 曇らぬ影もあらは
るゝと せめておもひあまりて 萬のはゞかりを忘れ 身をえうなきものになしはてゝい
びよふ月にさそはれいでなんとぞ思ひぬる

と頻りに悲しそうなことを書いては居るが 旅行にも馴れて居るし 公事出入をして來ようと
いふ元氣は岩をも劈くの概があり 又已に「轉寢記」の中に逢坂山、野路、墨俣川、鳴海瀉、八橋濱、名浦など
のことが書いてあるのであるから 慾と道連れでは是れ等曾遊の地を再踏査し尙ほ且つ未知の遠江
以東を旅行して來ようと云ふ様な好奇心も手傳つて居た様に想像されるのである

二十五日 きく河をいで、今日は大井川といふ河をわたる 水いとあせて 聞きしにたが
ひて わづらひなし 河原いくりとかや いとほるかなり 水のいでたらんおもかけおしは
からる

など、尼さんすましたもので 大井川の渡しも朝飯前の様に片づけて居る 宇都谷峠も難なく
越して静岡市の十町程手前の手越に泊まつたものである

こよひは 手越といふ所にとゞまる なにがしの僧正とかやのほりたまふとて いと人しけ
し やどかりかねたりつれど さすがに人のなき宿もありけり

阿佛尼が訴訟の爲め關東下向の止むなきに及び 愈出發するに當つて 五人の小供と訣別する
其の一齣の如きは綿々の情を叙ぶること頗る濃かであつて 讀む人をして思はず暗涙漣然として
下るを覺えしむるものがあるに拘はらず 旅行の記事になるといふと栗田口といふ所より車は返
へしつに起つて逢坂野洲川、一宮、熱田高師濱、天龍川からずうつと一號國道筋の有様を書いて行き其
の記叙は簡單なれど行程はすんずんと抄取つて行つて心持がよく景情洵に躍如として居る 即ち
阿佛尼の旅行せし建治三年に於ても一號國道は矢張り全國第一の街道たりしことを如實に示して

居ることがありありと讀む人の胸に直感せられるのである。全國の道路網全般に亘つて一日も早く道路改良の實を擧ぐるの緊切なる寔に以て知るべしであらう。紀貫之の旅行は承平五年のことである。今を距る約一千年前のことであるから其の旅行の不便は已むを得ざることであるが、芭蕉の行脚は元祿時代のことであるに僅に二百四十年前に過ぎない。阿佛尼の東海道旅行は、今より六百五十年も前のことに屬するに拘はらず一日に十里行程以上に撻取つて居ることが一再ではない。勿論芭蕉のは漫遊であるから、日數のかゝるのを厭はない譯ではあるが、奥州をまわるのに無慮七ヶ月を費して居る。蓋し徳川家康が全國に五街道を定めたが、所謂奥州街道は日光街道の宇都宮から分岐して白河に至るまでの間が、ほんとうの街道であつて、其れから以北はハイウエーではなくして翁の名づけた通り細道にすぎなかつたのである。運河網の全然存在せざる本邦に在つては鐵道の延長普及も亦さることながら、一日も早く道路交通網の完成に向つて、朝野協力一致、盡すべきの必要は今此の三文人の紀行を比較して見て更に其の感を深うせざるを得ないのである。

——一月五日——